

「東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学部3年 手代木さづき

<プログラム内容>

東アジアジュニアワークショップは、三日間のフィールドトリップと二日間の発表で構成されていた。前半のフィールドトリップでは、ソウル市内の移民や社会運動、老人福祉に関する場所を訪問した。このフィールドトリップは、ソウル大生によって計画されたもので、彼らはそれぞれの場所の説明をしてくれ、質問にも丁寧に応じてくれた。時には訪問先での講演やディスカッションもあった。後半の二日間は参加学生による発表が行われた。発表は15~20分で、その後10分ほど質疑応答の時間が設けられた。発表は、“Social Network & Political Life,” “Social Integration,” “Gender & Family,” “Health & Culture,” “Labor & Industry,” “Youth”の6つのセッションに分けられ、それぞれの学生の熱意が込められた発表は、とても興味深いものだった。

<学習成果>

フィールドトリップ

フィールドトリップで特に印象に残った場所は二つある。日本大使館前の少女像と梨花女子大学である。慰安婦の少女像のある日本大使館前では、毎週水曜日に行われている集会を見学した。少女像の近くのステージでは、若者によるダンスから始まり、演説、中高生による合唱・ダンスパフォーマンスが繰り広げられ、その場は活気に満ちていた。日本では、日韓の第一の外交課題であり、反日の象徴であるように報道される少女像を訪問するにあたって、私は少し緊張していた。日本人として、その場にどう立つべきなのか…。しかし、実際に訪問して感じたことは、少女像は反日のシンボルではなく、その英語名“The Statue of Peace”の示すように、世界の平和を祈念するものなのだったということだった。毎週水曜日の集会は20年以上にわたって続いていて、その日は1296回目だった。日本政府は少女像の撤去を韓国政府に要求しているが、韓国側がその要求を到底受け入れられないことは当然だと思った。梨花女子大学では、昨年、大学総長の退任を求める運動に参加していた学生の公演を聞くことができた。「学生運動の担い手は男子」というイメージのあった私にとって、女子だけで行われた運動の話はとても新鮮だった。とりわけ、学生たちの定めた、「リーダーを作らない」、「実際に抗議活動に参加している学生にのみ決定権を与える」といった講義活動のルールに驚いた。女子大生による運動と男子学生による運動を比べることで、社会運動のみでなく、ジェンダーについても考える良い機会となった。

発表

東アジアワークショップでの発表は、私が前期、最も力を入れてきたことで、準備のそれぞれの段階で多くのことを学んだ。このような研究発表自体が初めての経験である上、論理の組み立てがうまく立たずに苦しんだ。話の筋が立った後のPPTと原稿の英語訳も、慣れない作業で苦戦した。そして、その後の発表練習では、なるべく暗記して、聞き手が理解しやすい語り方に近づけるよう工夫した。このすべての過程において、本ワークショップ担当の安里先生、落合先生、そしてハイム先生に大変お世話になった。ソウル大での本番では、自分の納得のできる発表ができ、多くの質問、コメントももらうことができた。研究発表とはどのようなものかと実感できたことが、このワークショップの発表を通して得られた学習成果である。

<進路への影響>

私は、将来研究者になることを考えている。本ワークショップに参加して、もっと発表の経験を積みたいと思った。それと同時に、自分の意見を短時間でまとめて皆に分かりやすく伝えることの難しさも実感した。今回は、その能力が英語で求められることもしばしばあり、失敗を恐れて発言を遠慮してしまうこともあった。成功も失敗も含めて、自分の次の挑戦への自信へとつながる東アジアジュニアワークショップだった。